

城郭談話会 30周年を祝う・回想の関西城郭研究嚆矢

しろはく 古地図と城の博物館 富原文庫

古地図と城 古書肆 城郭文庫

代表 富原道晴

昨年の中世城郭研究会 40周年で祝辞を述べ、今また、兄弟団体ともいうべき城郭談話会が 30周年を迎えられる。心からお祝い申し上げたい。先にも述べたが、これらに共通することは永年にわたり、城郭研究の人材を育てられてきたことにある。いまや、学会、行政を含めて、多くの人材がそこにおられる。城郭研究がそれらから疎外されていた時代を考えると隔世の感がある。これらの時代に於いては城郭研究会は一人のカリスマ的人材に支えられていた。例えば、日本城郭協会の井上宗和（以下敬称略・順不同）の時代であった。多くの城郭研究者がそこに集い集まった。

約 50年前昭和 41年 1966年に日本城郭協会近畿学生研究会が産声を上げた。母体は日本城郭協会であり、日本城郭協会学生研究会であった。ほどなく、日本城郭協会から独立し、日本城郭近畿学生研究会（以下近畿学研）となった。その頃、日本城郭協会近畿支部も日本城郭協会から独立し、日本古城友の会を発足された。西日本においては、関西城郭研究会、日本古城友の会、東海古城研究会の 3 団体が多くの会員で活躍されていた。これらの会は 60年近い歳月を数えるのではなかろうか。その功績たるや、言後に絶するといえる。

近畿学研の設立に奔走したのは当時の学生研究会会長金原仁（土屋比都司）と初代近畿学研会長橋本楯夫であった。昭和 41年 4月 10日の設立会合に参加したのは日本城郭協会近畿支部長梶田巖と学生研究会で唯一関西地区在住の顧問朽木史郎であった。設立時のメンバーで城郭に携わっておられる方は橋本楯夫のみであるが、すぐに、高井勝巳、角田誠、松岡利郎、後に中井均、崎田兄弟、宮田逸民が入会された。応援してくれた学生研究会には小和田哲男、西ヶ谷泰弘、藤井尚夫、本田昇、池田誠、池田光雄、中田正光、田中祥彦、水島大二、三島正之が所属し、支えていただいたのは関西城郭研究会の山崎義隆、上川利治、海津栄太郎、源健男、日本古城友会の前田航二郎、藤井重夫、東海古城研究会の柳史郎。直接的には学生研究会顧問の大類伸、鳥羽正雄、桜井成広、中山光久、伊礼正雄、井上宗和、近畿学研顧問の朽木史郎、岡本良一、中島至、会員として指導いただいたのは山県謙二、福井健二、北垣聡一郎、久保田正雄、志村清、末宗玲子といった、今考えると時代を代表される方々であった。（多くの方を失念していると思うが、お許しいただきたい。）

近畿学研の機関紙は 2号から城春と命名され、伊礼正雄の命名、朽木史郎の書であった。昭和 55年 5月 3日第 25号で終刊するまで、実に 14年存続したことに成る。学生研究会という性格からすると関係者の努力は多大のものであった。このころのメンバーは会長下中俊明、企画部長中井均、編集長崎田欣二であった。この間、原稿は鳥羽正雄、桜井成広、中山光久からいただき、会員では小和田哲男、藤井尚夫、角田誠、松岡利郎、崎田兄弟が健筆を

振るった。昭和 55 年は 1980 年ですので、城郭談話会が 30 周年とすると 1984 年発足となり、当時小生は金沢にいましたので、経過は知りませんが、近畿学研の心意気を踏襲し、卒業後の活動基盤を構築されたのではないかと思います。

近畿学研時代の活動は城郭談話会の多くのメンバーの方が詳しいと思いますが、発足時の関西に中世城郭研究の発祥の目はなく、関西城郭研究会も日本古城友の会も対象は近世城郭であった。関西に中世城郭研究の目を芽生えさせたのは、日本城郭学生研究会、中でも。藤井尚夫であり、本田昇です。三島正之もよく来阪しました。当時の小生の西宮のマンションは学生研究会の基地の様でした。夜も寝ずに多くを語り合いました。昭和 42 年城春で中山光久資料による千早城特集をやり、関西で始めての中世城郭見学会を実施しました。以降、飯盛山城等の見学会や、学生研究会との合同見学会で、関西にも中世城郭研究の機運が根出しました。近畿学研も学生研究会も学生という制限のもとで継続は出来なくなりましたが、多くの方の支援をいただき、一時は 120 余名の会員を抱えた近畿学研、それを支えていただいた多くのメンバーが城郭談話会の初期に参加されています。多分心は若き絆であり、元気に満ちておられるのだと思います。小和田哲男の日本城郭協会、西ヶ谷泰弘の城郭史学会、八巻孝夫の中世城郭研究会、名前を聞いただけで元気が出る一騎当千の諸氏が集まれ、誰が中心かわからない城郭談話会、それが魅力かもしれません。これからもがんばってください。

小生はというと 2 年前にサカティンクスというインキメーカーを卒業しました。入社のも動機も城春がもたらせた印刷業界への憧れです。企業活動、印刷学会、印刷業界活動等思い残すところはありません。仕事は心置きなく、後輩に託しました。城には約 40 年の空白を経て、伊能忠敬を見習い再び乗り出すことにしました。浦島太郎のようなものですが、40 年ぶりに全力で青春時代のエネルギーで城に取り組みます。しろはく古地図と城の博物館富原文庫も平成 10 年の設立以来、16 年となります。一昨年、昨年と所蔵資料による『長野県の城絵図展』『会津若松城下絵図屏風展』『真田氏の城郭と戦歴展』を開催、今年も 4 月 5 日から 6 月 2 日まで安中市学習の森歴史博物館において『城絵図に見る上野国一富原文庫所蔵城絵図の世界一』展を開催しました。そのうち機会があれば、関西でも『明治政府陸軍省築造局城郭存廃調査絵図展』で関西の城郭絵図の一斉公開を企画したいと考えて居ます。その節はご協力ください。これからの仕事は所蔵資料による城郭研究の活性化であり、地域活性化のお手伝いです。古絵図、錦絵、古地図、古絵葉書、城郭グッズ等展示協力します。

貴会と違い、個人でできることは限界がありますが、40 年ぶりのマグマの爆発、近況は『古地図と城の泉』を 2 月までに 4 回メールでお届けしています。希望の方は連絡ください。shirohaku@kym.biglobe.ne.jp 迄。